

創刊に際して

ご縁があつて一心寺長老の私がこの会の代表をさせて頂いております。

さて、そこに文学作品があり、その中に踏み込むと、私たちの周りに回廊が現れます。それは心の中に形作られるだけではなく、目に見える街の姿で示してくれます。文学を読むことは旅に譬えられますが、単にその舞台を辿る旅ということ以上の深さと拡がりを求めて、このたび創刊のこの雑誌を「文學回廊」と名づけて頂きました。

織田作之助賞は今年で三十二回を数えます。

現在は大阪市と関西大学、パソナグループ、毎日新聞社、そして大阪文学振興会による実行委員会によって運営しています。既刊の小説から選考する織田作之助賞の本賞に加え、二十四歳までの創作公募による青春賞、十八歳までのU-18

賞と発展し、第三〇回からは記念冊子を発行してきました。

また、賞の運営とともに、文学振興の役割も欠かせないものとして、文学講演会や文学散歩などにも取り組み、大阪文学振興会の「関西文学散歩」は五百回を超えたと聞いています。

大阪を中心に、同心円的に拡がる関西を見渡しますと、古からの文学はもとより、新しい小説家の出現でも文学の宝庫と言えます。ところが、文学にかかる情報誌が少ないところから、大阪発の文学情報誌として織田作之助賞の記念冊子の衣替えをいたしました。

熱き文学への想いを込め、今後の発展を期して、ささやかながら創刊号をお届けします。

平成二八年三月

織田作之助賞実行委員会代表
大阪文学振興会代表

一心寺長老 高口恭行

文學回廊

Promenade de Littérature

創刊号

2016・3



第32回織田作之助U-18賞・受賞作

「パチンコ玉はUFO、
ブルーのビー玉は地球」
鳥月にひる

特集

大阪の陣と真田幸村

織田作之助賞 4

受賞作の紹介

堂垣園江『浪華古本屋騒動記』・三浦しをん『あの家に暮らす四人の女』
織田作之助賞「選評」辻原登／河田悌一／高村薫／湯川豊／田中和生
青春賞・U-18賞「選評」柏木治／堂垣園江／吉村萬吉

織田作之助青春賞 8

織田作之助青春賞 受賞作・最終候補作の紹介

織田作之助U-18賞 受賞作・最終候補作の紹介

織田作之助U-18賞・受賞作 〈全文掲載〉 10

パチンコ玉はUFO、ブラーのビー玉は地球 烏月にひる
オダサクと古本屋――『浪華古本屋騒動記』を書く―― 堂垣園江 19

■関西詩壇「希望」 杉山平一 22

■特集 大坂の陣と真田幸村

大坂の陣時代の一心寺住職

――「存牟(そんむ)上人」は家康と繋がっていたのか?―― 高口恭行

幸村の顔 高橋俊太郎 27

書斎の旅――司馬遼太郎『城塞』

――「大坂の陣」の舞台、天王寺界隈を訪ねて 吉原みどり 31

■連載 文学碑の今①――織田作之助 矢田草之助 34

●編集だより(表2)・表紙のことば(表2)・もくじ(2)

もくじ 文學回廊 創刊号

第32回織田作之助賞発表

大阪を代表する作家、織田作之助を顕彰し、織田作之助賞実行委員会が主催する第32回の織田作之助賞と織田作之助青春賞・U-18賞の受賞作品が、昨年末に開いた最終選考会で決定しました。ここに、改めてその結果と作品選評などを紹介いたします。

■主催 ▼織田作之助賞実行委員会 (構成▼大阪市・大阪文学振興会・関西大学・パソコングループ・毎日新聞社)
■協賛 ▼一心寺・ループル書店
■後援 ▼大阪府教育委員会・大阪市教育委員会

織田作之助賞

気鋭の作家による小説が対象。今回は、平成二六年(二〇一四)一月一日から平成二七年(二〇一五)一〇月三一日までに初版が刊行された単行本の中から、新聞社・出版社・有識者および大阪文学振興会会員に呼びかけ、64点(重複を含む)の推薦をいただきました。

★織田作之助賞

「浪華古本屋騒動記」(講談社)

堂垣 園江

「あの家に暮らす四人の女」(中央公論新社)

三浦しをん

■織田作之助賞最終候補作

谷川直子「四月は少しつめたくて」(河出書房新社)

堂垣園江「浪華古本屋騒動記」(講談社)

星野智幸「呪文」(河出書房新社)

三浦しをん「あの家に暮らす四人の女」(中央公論新社)

受賞作の紹介

堂垣園江

「浪華古本屋騒動記」

(講談社)



三浦しをん

「あの家に暮らす四人の女」

(中央公論新社)



舞台は大阪。古本屋という商売は現代では厳しい。大きく稼げる古典籍といふものは、歴史的な大火に何度も見舞われた大阪からはもはや出てくる筈がない、というのが古本屋の間では常識となっている。ところが、名物古書店の三代目・高津は、遊郭の脇の下から見つけてきたという古地図を持つて「お宝はあんねん」と若い古本屋たちに号令をかけた。

しかし、大学を出て店を継いだ啓太は風俗通いを噂され、チキは街金に手を出して妻と元愛人に店を任せたまま行方不明。高津の下に集まつたのは、チキの店を手伝う心優しいムシカと、東京で働く理香子の二人だけ。小学校時代同級生だった理香子に、啓太もムシカも思いを寄せていた。高津の読みどおり、大阪のどこかにお宝は眠つているのか? 古本屋たちは智恵を巡らせ、それぞれのやり方でお宝探しを始める。手に入れるのは果たして、金か、紙くずか、はたまた……。

谷崎潤一郎没後五十年の昨年、中央公論新社から、「谷崎潤一郎メモリアル特別小説」と銘打たれた作品が発売された。それが「あの家に暮らす四人の女」だ。

舞台は現代、杉並区の善福寺川沿いにある古びた洋館・牧田家に暮らすのは、37歳独身の佐知と母鶴代、そして佐知と同い年の友人雪乃とその後輩多恵美の女四人。敷地内の守衛小屋には山田老人も住んでいる。

彼女たちの日常はかしましくも豊かだ。皆でお花見に行ったり、水のトラブルに見舞われたりと、谷崎潤一郎の『細雪』を連想させるエピソードも多いが、「あの家に暮らす三人」の四人は姉妹ではなく、母娘と赤の他人、適度な距離を保ち、さりげなく支え合つて暮らす様子には『細雪』の時代とは異なる関係の共同生活が描かれる。物語の途中で幾度か語り手が交代し、終盤、佐知は不思議な体験をする。日常に潜む非日常に気づかされる。

織田作之助賞・選評

懐深く飽きもせず

作家・辻原登さん

「あの家に暮らす四人の女」。同居する女性のそれぞれが魅力的で、4人の関係の緊張と緩和が巧みに描かれるだけなく、番人小屋に住む山田老人の愚直さがさらにその関係に興を添える。しかも全体の語りは、失踪ののち死んだヒロインの父親という設定で、物語を一層懐の深いものにしている。

『浪華古本屋騒動記』は騒動記にふさわしく、奇妙奇天烈な大阪人たちの宝探しのてんやわんやを巧みなストーリーテリングで描いて飽きさせない。特に香雨という少女の造形と、冒頭とラストの奇妙に歪んだ照応が、この作者の並々ならぬ手腕を示している。対照的な二つの作品の受賞を慶びたい。

「大器晩成」の言葉通り

前関西大学長・河田悌一さん

今日は、全く異質な風土と日常を舞台とする、二つの小説が選ばれた。大阪に生まれた堂垣園江氏は、大阪弁を巧みに駆使して男と男、人と人、女との奇妙な関係と人間像を、実際に見事に描写する。古本屋、遊郭、宝探しを三題的に利用しながら、東京生まれの三浦しをん氏は、杉並の旧い洋館で共同生活を送る4人の個性的な女性たちを描くマルヘンだ。谷崎潤一郎の名作『細雪』を下敷きにして、終盤に突然死んだ父親の魂が助つ人として登場してくる。その箇所に違和感を抱く選考委員もあつた。2作品とも最後まで一気呵成に読ませる不思議な魅力を持つていた。

人間を描くことから

作家・高村薰さん

小説の面白さはあくまで結果である。星野智幸氏の『呪文』は、不気味な力タストロフを見せてやろうという意図により先に、人間を描くことから始めなければ小説にならない。谷川直子氏の『四月は少しつめたくて』は、主婦たちの身体感覚をよく描きだしている一

ユーモアとリズム感

文芸評論家・湯川豊さん

三浦しをんさんの作品は、4人の女性の描き分けがみごとである。古い洋館に母娘と、娘の友人である独身女性2人が住んでゆるやかな共同生活をいとなむというのは、家族を超える生き方を示唆しているのかもしれない。文章に周到に計算されているとは言えず、小説がざわついているのが惜しい。

いる2作の受賞に、私は賛成した。

さりげない小説時空

文芸評論家・田中和生さん

前回につづいて、2作受賞となつたが、最終選考には読みごたえのある小説ばかり並んだ。その結果である。星野作品は、ベテランの領域に入りつある書き手の、問題意識と小説的空間の異様さがうまく重なった力作と思つて推したが、十分な支持が得られなかつた。谷川作品も、詩の言葉の切実さを小説的に語ることに成功し、推すべき快作と思つて臨んだが、小説と詩の言葉の関係について本質的な議論となり、受賞とはならなかつた。議論のなかで、さりげない書きぶりの堂垣作品が、実際に読みごたえのある小説的な時空を実現していると感じ、強く推した。三浦作品を強く推す選考委員も複数おり、同時受賞となつた。

他を圧倒するような応募作品のない中、文章にはなお粗さが見え隠れするものの、受賞作がもとども無理なく読者を引き込む小説的枠組みと確かにアリティを感じさせた。現実との折り合いに微かな救いを醸す書き方も自然だ。『メチルエフェドリン』も、描かれる現実が的確な言葉の配列に支えられていて、捨てがたい魅力がある。ただ、物語の背景をどう読むかで意見が分かれた。U-18賞では、受賞作が独創や鋭い誘惑に足をすくわれることなく、書き慣れた端正な文章の力で物語をまとめあげていた。全体の水準は確実に上がつている。今後に期待したい。

「本当の事」感じさせる力

作家・吉村萬堯さん

いた。「メチルエフェドリン」は構成力や勢いに引っ張られたが、設定の懲りすぎが仇となつた。「はきだめ」が当選作となつたのは、自己満足から離れ、読み手を意識していくからである。一方、U-18賞はさまざまな作品が出てくる。ファンタジー仕立ての『当選作』に、羽ばたく創造を感じずにはいられない。

どちらの賞もレベルが安定し、今年も将来性のある作品が集まつた。「はきだめ」には『本当の事』が書かれていた。他の作品もそれぞれ力がいい感じた。他の作品もそれぞれ力があつたが、この一点において受賞作に一步及ばなかつたと思う。U-18賞受賞作『パチンコ玉はUFO、ブルーのビーベ玉は地球』は、語りだけで読ませる力を買った。見えないものを描こうとした『夜の十景』を私は推したが、やや言葉に溺れる気味があつたか。「あの電車では悪くないが小説としての面白さにやや欠けた。『佐々野駅にて』に白さは○、「亡失、描いた夏空」は△をついた。全員、書き続けて欲しい。

自己満足離れ読み手意識

作家・堂垣園江さん

文学賞にはおののぞと傾向が生まれる。青賞も回を重ねるごとに独自の色を濃くし、主人公たちが曖昧な絶望の中でもがいている。今回もグレーゾーンを描いた作品の競り合ひだつた。どの作品にも光るものがあり、それでいて生きかすことができずにして持て余して

織田作之助青春賞

※8月31日時点で24歳まで。全国応募総数100点。

受賞作

「はぎだめ」

犬浦香魚子
いぬうらあゆこ

*作品は『三田文学』(1016年冬季号)に掲載

21歳(応募時)京都市

■青春賞最終候補作

- 「はぎだめ」犬浦香魚子
- 「メチルエフエドリン」荊冠きさき
- 「やさしいふたり」秋佐見洋
- 「挟まれた」金杜昊
- 「指折り数えて一、二、三」福田幸之助

もがく日常希望の芽

大学の文芸サークルで本格的に小説を書き始めた。最終年を迎える、初めて挑んだ青春賞での受賞。「これからも小説を書き続けていいんだって、背中を押してもらつた感じです」と声を弾ませる。

受賞作は契約社員の「あたし」が主人公。年上のフリーターとの同居生活に息苦しさを覚え、町を出たいと思うが引つ越し代えない。男友達との浮気を繰り返し、どうしようもない日常生活をやり過ごすが……。もがき苦しみながら、「あたし」の心に芽生えたかすかな希望をつづつた。

「閉塞感や劣等感にさいなまれ、落ち込むこともある。掃きだめのような世界で、それでも前を向いて生きていく普通の人の姿を描きたかった」。無料通信アプリ「LINE(ライン)」のやりとりや街中のデモなど同時代的な要素も加えた。

「サークルで私の小説は主観的過ぎると言っていたので、社会の出来事にも意識的に目を向けました」。小説だけでなく、種田山頭火の俳句や荻原朔太郎の詩も好んで読む。「近代の作家が描いた人間の孤独や鬱屈した感情は現代にも通じる。私も人から共感を得られる作品が書けるよう、働きながらいろんなことを吸収したい」。社会人としての新生活を前に、決意を新たにした。

(毎日新聞記者・清水有香)

一人語り 独特の世界観

受賞作

織田作之助U-18賞

*3月31日時点での18歳迄。全国。応募総数四五点。

パチンコ玉はUFO、

ブルーのビー玉は地球

鳥月にひる
うつき

16歳(応募時)埼玉県飯能市

(1頁)に掲載

■U-18賞最終候補作

「あの日電車で」月島麟

「夜の十景」芳仲宏暢

「失、描いた青空」千野聖広

「パチンコ玉はUFO、ブルー

「ビー玉は地球」鳥月にひる

「佐々野駅にて」篠原美里

7年前、9歳だった「僕」がパチンコ玉のように小さなUFOを田んぼで拾ったことから始まる不思議な物語。ある時、「僕」の夢に転校生の女の子「Q」が現れ、彼女が宇宙人であることを知る。UFOに乗つて地球を飛び出した「僕」と「Q」。一人語りの生き生きとした文体で独特の世界観を紡いだ。

「Q」は夢の中で、月の裏側にいる100羽のウサギの話をする。「月を眺めている時、ふと頭に浮かびました」。最近は身近なネタをスマートフォンでメモするようにしている。尊敬する作家はカフカやサルトル、安部公房だと話す。「現実ではあり得ないような話が面白い。小説ならではの世界を僕も表現したい」

中学2年生の時、初めて小説を書いた。原稿用紙5枚の短編を友達に見せたが「つまらないって言われて書くのをやめました」。再び筆を執つたのは高校1年の夏休み明け。勉強する理由を見いだせず不登校になり、約1年間読書や執筆に費やした。「小説を書いたことで心の整理が出来た気がします」

受賞作はその時に生まれた。「勉強も運動も苦手だけど、誇れるものが出来ました」と語る。「読んでくれた人の心にいつまでも残るような作品を書くのが目標です」

(毎日新聞記者・清水有香)

第32回織田作之助UFO賞・受賞作

パチンコ玉はUFO、 ブルーのビー玉は地球

鳥月にひる(うつき にひる)

七年前の今日、ぼくはUFOを拾った。話はそこから始まるんだ。こればぼくがUFOを拾つたことで体験した、ちょっと不思議な出来事をまとめたものだ。この物語を聞いてきみがどう思うかはきみの自由だ。でも一つだけ間違えてほしくないのは、ぼくがこの物語をきみに話すにあたつて、ぼくは一つたりとも嘘をついていないということなんだ。つまりこれは“本当にあつた”出来事なんだな。まあとにかく話そうと思う。

そいつは直径一センチにも満たない銀色の球体だった。そいつていうのはUFOのことさ。ぼくはそいつを通学路の途中にある田んぼで拾つたんだ。でも田んぼと言つても、あの水が溜まつた夏の田んぼじゃなくつて、稻刈りもすでに済んでいた秋の田んぼだよ。むしろ畠と言つたほうがいいかも知れないね。何もない、茶色の土地だもん。それで、ぼくがUFOを拾つたときの状況だけど、その時ぼくは学校から家に向かつて石を蹴りながら歩いていたんだ。つまり下校中だつたつてわけ。そしてぼくが田んぼのところにさしかかったときに、力の入れ方を間違つたのか、蹴るところが悪かつたのか、蹴つて

いた石はまっすぐ転がらずに、田んぼのほうに転がつて行つちゃつたんだ。石はそのまま用水路の中に落ちてしまつた。そこでぼくは新しい手ごろな石がないかあたりを見回した。それで田んぼの中できらきら光る物体を発見したつてことなんだ。ぼくは急いで近寄つて、拾つてそいつをポケットにしまつた。見た目以上にずつしりしていたな。とにかくUFOを拾つたぼくは、走つて家まで帰つたよ。

家に着いたぼくはママに見つからぬるようにこつそりと二階の自分の部屋へと向かつた。そしてポケットからUFOを取り出すと、そいつを宝箱の中にそつとしまいこんだんだ。ぼおつと窓の外を見ると、沈みかけた夕日が山の向こう側を燃やしているみたいで、きれいだつたな。

夜、月が太陽の光を受けて輝いていた。そう考えると、UFOは月に似てゐるかもしない。9歳のぼくは思ったみたいだ。UFOのことが気になつたぼくは、再び宝箱を引っ張り出してきて、中からUFOを取り出した。田んぼにあつたときと何の変化もない銀色の塊だつた。やっぱり重かつたな。それ

にしても、この大きさといい、つやつやとしたさわり心地といい、中に何かが詰まつているような重さといい、すべてが愛おしかつたね。ぼくはUFOを持つたまま窓辺に行つた。当時のぼくの部屋からは、月以外にも様々な星が見えたんだ。ぼくはその星々を眺めながら、手の中で眠つてゐるUFOをうつとりと見つめた。この星の中のどこからこのUFOはやつてきたのだろう。そんなことを考えていたときだつたと思う。突然手の中のUFOがぶるぶると振動し始めたんだ。それと同時にぼくの手のひらに激痛が走つた。ぼくは反射的に手を開いてしまつたんだな。その瞬間、UFOが窓を突き破つて夜空へと飛び込んで行つたんだ。何してゐの? 一階のキッチンで夕飯を作つてゐるであろうママの声がした。何でもないよ。今考えればそれでいたのかもしれないけど、当時のぼくはそう言えどりあえずは大丈夫だと思つていたみたいだ。ママはそれつきり何も言わなかつた。その時ぼくが考へてゐたのは割れた窓のことなんかじやなく、もちろん消えたUFOのことだつた。今から探しに行つてもこんな暗闇じゃ見つけられないだろう。それにママが怪しむはずだ

つた。やれやれ、とぼくはため息をついて、その日は諦めることにしたんだ。窓に空いた穴から夜が液体となつて入つてくる気がしたよ。

次の日の朝、ぼくはまずは家の周りを探すことにしてたんだ。何をつて、UFOをだよ。一時間探したところでぼくは諦めた。とりあえずは、諦めた。だってその日は普通に学校がある日だったんだもん。それでちよつと考えればわかることだつた。あんなに小さいものを見つけるのは容易なことではないつてことがね。昨日は偶然見つけられただけだ。もし季節が夏だつたら、稻が邪魔をして絶対に見つけられなかつたはずだよ。それにUFOが草むらに落ちていないなんていう確証はなかつた。事実、当時のぼくの家の周りには草むらがいっぱいあつたんだ。そういうこともあつて、ぼくは泣く泣く学校へと向かつた。

その日、クラスではいつもと少し違うことがあつた。そのためにクラスのみんなも少しばかりそわそわしていた。そう、転校生がやつてきたんだ。それ

みんなも)異質な何かを見たんだ。その異質なもの正体とはなんなのか、これはこの物語のいうなればオチの部分だから、言うべき時が来たら、言うよ。

先生はQについて一通り説明したあと、Qの新しい席を指示した。君の席はあそこだ。そういうつて指示のはぼくの隣の席だつた。うすうす予想はしていたんだけど——だつてクラスに入つたら、ぼくの隣に新しい席が置いてあつたんだもん——いざ言わると不思議な気持ちになつたな。うれしいような、緊張するような、そんな感情だつたよ。それはQがこつちに近づいてくるに従つて、大きくなり、Qが席に着いたときに最高潮に達した。

「Kです。よろしく」

ぼくは軽く自己紹介をして手を差し出したんだ。自分で驚くほどすらすらとした喋りと滑らかな動作だつたね。まるで自分以外の誰かがぼくのことを作り操作しているみたいだ。

「よろしく」

Qは静かに言つて、少し悩んでから手を握つた。不思議な握り方だつたよ。握るというよりも触れる

はショートボブの明るい髪をした女の子だつた。「初めまして、××町から來たQです。よろしくお願いします」

クラスの半分が男の子ではなかつたことに落胆し、クラスの半分がそれとは反対の理由で喜んだ。ほら、9歳つてまだそういうのが表に出ちゃう歳でしょ?でも、どちらにせよ転校生のことを快く受け入れていたことに変わりはないよ。これも9歳くらいの特徴だよね。誰とでも仲良くなれる。ただQが入つてきたときに、クラスの空気が一瞬にして変わつたことは事実だつた。それには二つのわけがあつたんだ。一つ目はQがとてもなく可愛かつたということだ。例えるなら春の野うさぎだね。春の野うさぎみたいに可愛かつたよ。當時ももちろんそう思つたけど、今振り返つてみてつくづく思う。そして二つ目の理由なんだけど、それはQが眼帯をしているつてことだつた。いやいや、誤解するかもしれないから断つておくけど、それがQの可愛さを損なうことは決してなかつたよ。むしろ「不思議」な印象を与えてさらに魅力的だつた。問題はそういうことではなかつた。その「不思議」さんの陰にぼくは(たぶんほかの

いう感じで、感触もまるでガラスを触つてゐたみたいだつたな。それから一日ぼくは雲の上を歩いているようなふわふわした感覚で過ごした気がする。

UFOは簡単に見つかつた。ぼくは学校が終わつたら、すぐ家に帰つてまた家の周りを搜索するつもりだつたんだけど、なんと帰り道の途中でUFOを見つけちゃつたんだ。どこで見つけたと思う?正解は田んぼだよ。前と同じところに前と同じように落ちていたんだ。ぼくは今度こそ逃がさないようにしつかり掴んで、そのあとでそいつを太陽にかざしてみたんだ。まるで金環日食みたいにUFOの周りを太陽が縁取つた。それからぼくはしばらく様々な角度からUFOを見ていたんだけど、あんまり帰るのが遅いとママに怒られると思つて、ぼくは家へと向かつたんだ。すると風がふうふうと吹いて、ぼくの前髪を撫でたよ。

「ガラス、あれはいつたい何?」

家に入った瞬間、玄関のところでママに怒鳴られちゃつた。ごめんなさい。ぼくはとりあえず謝つた。

「謝る前にどうしてガラスが割れてるのか説明しない」

こういうときのママは厳しいんだ。きっと何もかもお見通しなんだろう。それでもぼくは知らないふりをした。

「ぼくにもわからないよ。朝起きたら割れただんだ」

「何もしてないのにガラスが割れるわけないでしょ。嘘をつかないで、ちゃんと説明しなさい」

ぼくは困ったことになつたなど思つたよ。だつて本当のこと——UFOが割つただなんて言つたところで、嘘をつくなど怒鳴られるに決まつてたからだ。「野球のボールを投げて遊んでたら、割つちやつたんだ」

ぼくはとにかく思ついたことを□にしたよ。

「野球のボール? あんた野球なんてやってないでしょ。どうしてボールなんて持つてるのよ」

ママは怪訝そうな顔をした。

「ひ、拾つたんだよ」

「あんたはなんでも拾つてくるんだから……」

何とか信じてもらえたようだ。本当にごめんなさい。

「もう今回限りだからね。次同じようなことをやつた

ら、許さないから。それともう何も拾つてこないこと」なんだかんだ言つて、ママはやさしい。あるいは甘いと言つべきかもね。ぼくはもう一度ごめんなさいと言つてから、自分の部屋へと続く階段を駆け上がりをした。ポケットに拾つてきたUFOを忍ばせながら。

夜、夢の中。Qがぼくに向かつて話しかけてきたんだ。

「ねえ、月の裏側つてどうなつてると思う?」

わからないな。しばらく悩んでから出した回答がそれだつた。それにしてもQは何でそんなことを聞いてくるんだろう。

「知りたい?」

うん。知りたい。ぼくは知りたいよ……。

「じゃあ教えてあげる」

そう言つてQは語りだしたんだ。

「月にウサギがいることは知つてるよね? だけどKくんが知つているのはきっと、月の表側で餅をついているウサギのことだけだと思う……。本当は月には101羽のウサギがいるの。1羽はさつき言つた餅をついているウサギ。あれはウサギの王さまな

の。残りの100羽のウサギはみんな月の裏側にいるのよ。そこは私たちの想像を絶するような世界なの。だつてあんな狭い場所に100羽ものウサギがいるんだもの。当然のごとく争いが始まるわ。つまりは殺し合いよ。そこで最後まで生き残つたウサギが、次の月の表側のウサギになれるの。満月は新しいウサギの王さま誕生の象徴なのよ。逆に新月はかつてのウサギの王さまの死を象徴しているわ。そうそう、なんでウサギの王さまが餅つきなんとしているかわかる? 実はあれは餅つきじゃないの。あれは自分が殺してきた99羽のウサギと、自分の前に月の表側にいたウサギの王さまの死骸をついてるの。なぜならその死骸から新しい100羽のウサギを生み出されため。あれは新しい100羽を生むための儀式なのよ。王さまが死に、争い、また新しい王さまが生まれる。月はそのサイクルを私たちが生まれてくるずっとずつと前から繰り返しているのよ。そして私たちが死んだあとずつと……」

Qはそれだけ言うと静かに微笑んでぼくの前から姿を消したんだ。あとには闇だけが残つた。黒に黒を混ぜたような闇だけが。

風が強く吹いていたのを覚えている。屋上に着くとそこにはすでにQがいた。

「ごめん、待つた？」

ぼくは柵を掴んで遠くを眺めているQの背中に向かつて言つた。

「大丈夫、私も今来たところだから」

Qが振り返つて言う。

「それで、夢じやないつてどういうこと？」

「その前にこれを見てくれる？」

そう言つてQはぼくのほうに手を差し出したんだ。

そこには——UFOが乗つていた。

「それは……」

「これはKくんも知つてのとおりUFOだよ」

「なんでQさんが持つているの？」

「昨日Kくんのところから持つてきたの」

ぼくの家から持つてきた？ ぼくは驚いてしまつたよ。だってぼくはQを部屋に入れた覚えなんてなかつたんだもん。

「驚くのも無理はないよ。私はKくんが寝ているときにUFOをあの田んぼに呼び寄せたの。

一昨日も同じようにUFOを呼び寄せたんだけど、私

が回収しに行く前にまたKくんに取られちゃつたの」「どうしてそんなことができるの？」
ぼくが恐る恐る聞くと、Qは一呼吸開けてから言ったんだ。

「私は宇宙人なの」

そしてQは眼帯を外した。その瞬間Qが光に包まれたんだ。ぼくは眩しさに耐えられなくて、目を瞑ってしまった。そして再び目を開けたとき、そこに立っていたのは紛れもない、宇宙人だつた。

「これが私の本当の姿なの」

ぼくはあまりの衝撃に言葉を失つてしまつたよ。ぼくがずっと会いたいと思つていた宇宙人が、今、目の前にいる！

「ほ、本当にいたんだ……」

「あの田んぼはUFOの発着地点なの」

Qは、宇宙人の姿をしたQは話し始めたんだ。

「ほら、ミスティリーサークルって知つてるでしょ？ あそこの田んぼにもミスティリーサークルが作られたつて事件、覚えてる？ あれは私の仲間が作つたものなの」

そういうてQはぼくの手を握つて屋上の出口へと歩き出しながら、Qは、宇宙人の姿をしたQは話し始めたんだ。そして到着と同時に田んぼの真ん中にUFOを置いたQが、ぼくに向かつて言つた。そして気が付くとぼくたち二人はUFOの中にいたんだ。UFOの中は温かい水のようなもので満たされていて、とても気持ちがよかつたよ。やがてUFOがゆっくりと飛び立つた。

「あれはテレパシーよ」
「何のためにあんなことをぼくに話してくれたの？」

「あれは私のパパが、私がまだ小さい頃、夜眠れないときによく話してくれたことなの。そしてその話の最後にパパは必ずこう言つたわ。お前に大切な人ができたらこの話をあげなさいつてね」
ぼくが……大切な人？ もちろんうれしかつたよ。でも……。

「Kくん、宇宙に行つてみたい？」

Qは突然言つた。え？ ぼくはQの言葉を理解するまでにしばらく時間を必要とした。

「行きたい？」
Qがもう一度言う。

「いい、行きたい」
宇宙に行くのは当時のぼくの夢だつたんだ。
「うん、わかつた。じゃあ今から行こう」

ぼくの話はこれでおしまい。あのあと……あのあつてのはぼくとQが宇宙に行つたあとのことだけれど、あのあとぼくとQがどうなつたかは、秘密だ。

残念ながらね。でもぼくはもうあの町に住んでいないし、あの田んぼもぼくが引っ越す前に新しい家が

たくさん建つて消えてしまった。それは事実だ。

そもそもなんでぼくがきみにこんな話をしたのかと言ふと、七年の時を経て、ぼくの心に整理がついたからなんだ。そこでぼくはこの話を誰かにしたい。

しなくてはならない。そう思つたんだな。もしもき

みがこの話を氣に入つてくれたんだとしたら、それ

だけでもうばくはきみにこの話をした価値があると思つてはいる。でも、もしも気に入つてもらえたなかつ

たとしても、それはそれでいいとも思つてゐるんだ。

だけどね、氣に入つてもらえようがもらえなかろう

が、十年後、二十年後、きみがふと夜空を見上げたときには、そこに月が輝いていて、その月を見たとき

にきみがこの話を思い出してくれたとしたら、そん

なにうれしいことはない。そうだ、今日はちょうど

満月じゃないかな？ ほら、見てごらん。

(了)

■特別寄稿

オダサクと古本屋

—『浪華古本屋騒動記』を書く—

堂垣園江



「家を出て、表門の鳥居をくぐると、もう高津表門筋の坂道、その坂道を登りつめた南側に、『かにどん』というぜんざい屋があつたことはもう知つている人はほとんどいないでしょう」

織田作之助の「アド・バルーン」の一説である。高津の坂を下り、寺町沿いを少し歩くと生國魂神社の北門が見えてくる。云々と物語は続くのだが、こういった細かな地名描写は彼特有のものであり、必ず食べ物と結びついている。

「まあ、ついてきいや」と自転車を押しながらサブカル系若手古本屋たちと歩いた道は、まさにそのルートを辿るプチ・遠足だった。大阪古書会館で行われる定期古書即売会を覗きに行つた帰りである。谷町六丁目を出発点に谷町筋を南下し、途中、高津神社や生國魂神社に寄り道して、天王寺をゴールに定めた。直線距離にして、三キロ弱。しかし、上町台地の尾根を縦断する谷町筋は、う

ねるような坂が凹凸を繰り返している。夕方であろうと、くそ暑い真夏に三キロの坂はキツい。私が徒歩だから彼らも自転車に乗らずに押して歩いた。タクシーに乗りたいとは、言い出せない。彼らが楽しそうだからだ。オダサクも楽しそうだらうか、このしんどすぎる散歩が。

千日前筋との交差点に差し掛かつた時、あつ、と一人が顔を上げた。思わず私たちも彼の視線の先に目をやつた。釜ヶ崎に沈む夕日がアスファルトに反射して黄金色に輝いていたのである。まるでドヤ街が放つ後光だつた。信号が青に変わつても、私たちは動けない。どうしてあんなに、切ないまでに美しく見えたのだろう。

「喉、乾いてたからちやう？」あつさり言われた。確かに私は、ほぼ脱水状態だつた。だからといつて、谷町筋で砂漠の蜃氣楼に似た錯覚？ 笑えまへんがな。予定通り高津神社と生國魂神社に立ち寄り、境内へ続く急な石段で再び疲れだ。古本屋君の一人が、お賽錢箱の縁に十円玉を置いて「十置く（十億）」と大真面目に柏手を打つ。笑つていいのかどうかが分からぬ。地下鉄の駅をいくつも通り越してプチ・遠足は続いた。私の膝はとつくにガクガクし、汗は髪を伝つて滴り落ちてくる。自動販売機を目にするたびに、何度、飲み物を買おうとしただろう。しかし、「がまんせえ」と叱られた。「ゴールへたどり着いた時に飲むビールが最高やねん。それを些細な欲望に負けて、わやにしてええんか」と。ええんです、古本屋諸君。だつて私、下戸ですから。

最高のビールを味わうために、彼らは熱中症の危険も顧みずに水分補給を我慢する。それ程の事ですか、と聞きたくなるが、願掛けにも似た雰囲気につら

れ、私まで一か八かの賭けにのつてしまふ。きっと彼らは無意識のうちに日常と勝負しているのだろう。たとえそれがくだらない事であろうと。

天王寺の安飲み屋に入つて乾杯したときは、汗だくのボロボロだつた。極上の一瞬というより、熱中症にならなくてよかつたとホッとしたのを覚えている。酒のつまみはトマトやキムチといった調理なしの生ものか、せいぜいイカ焼き。オダサクのB級グルメの「うまいもん」よりはるかに劣る皿に並べただけの食材に、「美味しい」と呟いてしまうから不思議である。水分補給もせずに歩いた試練のたまものだろうか。だとしても、やっぱり水は飲んだほうがいい。ほどよくビールがそれぞれの体を潤してくると、背の高い古本屋君が猫背になつて斜め四五度の角度で頬杖をついた。物憂げな表情の視線の先は、宙の向こうに焦点を結んでいる。自分だけの孤独な世界に浸つているのかもしれない。「ちやうて。あのボケ、オダサクの真似をしとんねん」と老舗古本屋の店主が、すかさず突つ込みを入れた。明治創業のその古書店には、オダサクもしそつちゅう足を運んでいたという。事実、オダサクの作品に、その古書店の名前が時々出てくる。古本屋たちといふと、ふとした時に、見えないオダサクの空気に触れてしまう。そこには生きたオダサクがいる。今年度、織田作之助賞は第三十二回目を迎えた。

(どうがき そのえ／作家)
*『浪華古本屋騒動記』(講談社)

希望

杉山平一

夕ぐれはしずかに
おそつてくるのに
不幸や悲しみの
事件は

列車や電車の
トンネルのよう

とつぜん不意に

自分たちを

闇のなかに放り込んでしまうが
我慢していればよいのだ

一点

小さな銀貨のような光が
みるみるぐんぐん
拡がつて迎えにくる筈だ

負けるな

詩集『希望』（2011年編集工房ノア）より

杉山平一は詩人であり映画評論家であり織田作之助の親友でした。また、大阪文学振興会と織田作之助賞の創設に尽力し、会長や選考委員を歴任しました。2012年に九十七歳で永眠されました。が、その前年の詩集『希望』は現代詩人賞を受賞しました。自身が阪神大震災を経験し、東日本大震災に際し書かれた作品です。



大阪は「大坂の陣四〇〇年」、加えてNHK大河ドラマ「真田丸」で盛り上がりつつある。茶臼山・一心寺は冬の陣では徳川家康の本陣、そして夏の陣では真田信繁（幸村）の本陣が置かれた。つまり、かつての激戦地の只中に、大阪文学振興会と織田作之助賞実行委員会の事務局がある。 目を閉じれば、真田信繁（幸村）が「日の本一の兵」と呼ばれる働きをしたその姿、聞こえてくる。大坂の陣は多くの物語を生み、まだまだ謎も多い。この地に事務所を構える地の利を活かして、「大坂の陣と真田幸村」を特集する。

大坂の陣時代の一心寺住職

高口恭行

「存牟上人」は家康公と繋がっていたのか？



中興本尊存牟上人寿像（軸・一部）

一心寺では文治元年（1185年）、この地で「日想観」を修せられた「開山」法然上人と、幕末天保年間（1834年）に荒廃していた一心寺を再建して今日の基礎を興された第五十世「中興」真阿上人のお二人を開山上人、中興上人として特筆しています。

一心寺の沿革はこのお二方によつて代表されるのですが、実はこの間にもうお一人、「大坂の陣」時代の一心寺に、「中興開山」と呼ばれる第三十一世本尊存牟（1555年～1621年）上人がおられました。「中興開山」の理由は、それまで「法然上人ゆかりの寺」であった一心寺に、存牟上人が契機となつて「家康公ゆかりの寺」と言う側面が加わり、姿形も刷新され、新一心寺が誕生したかのごとくに変貌したと言う過程があつたからです。

さて、本尊存牟上人については六五歳、最晩年の肖像画（＊1）とその百年後、元禄年間の住職によって添えられた解説文（＊2）が伝えられており、その記すところによれば、

「当寺中興本尊了道存牟上人」は三州（三河）の人で、「関東十八檀林」結城弘経寺開山存把和尚のもとで出家得度され、若くして家康公の恩顧にあずかり、下総佐倉の清光寺に薫した後、檀林を辞して諸国を修行して大坂に至り、大衆に勧めて止々呂美の養谷寺、堺の一雲寺、紀州の大恩寺など三ヶ處の念佛道場を建立。さらに大坂大通寺に暫住して専修念佛を勧めるかたわら大藏經から念佛の要文をあつめて世に梓行するなど顕著な布教活動で、すでに世に知られた存在だつたようです。

慶長元年（1596年）の頃、法然上人曰想觀の跡を慕つて当山に入られ、思いを落日に懸けて千日禁足、昼夜不臥にして無間修（連續）の念佛を励行され、その評判が広まって「道俗雲のごとくに集まり、宗をあらため行を受くる人多かりけり」とあります。以上の経緯は存牟上人が家康公との間に古くから何らかの接点があり、一心寺は家康公の大坂における

拠点としての意味が込められていたのではないかと思われなくもありません。

慶長五年二月七日、すでに大老として大坂城西の丸に居られた家康公の八男仙千代丸が薨られたおり、一心寺でそのご葬儀が営まれました。存牟上人が焼香導師を勤め、知恩院の満誉大僧正も参列されたと言います。この時家康公は存牟に「一心寺を整えるにあたつては、いかなる援助も望み通りに叶える」旨仰せられたのに対し、上人は「境内不刹生」の他に所望なしと答えられ、家康公から花押入りの「札」を賜つたと言います。慶長五年九月には「関ヶ原の合戦」がありましたが、その後も仙千代丸の一周忌など家康公は来寺され、それまで「寿命山觀称院一心寺」であつた名称を仙千代丸の法名「高岳院花窓林陽大童子」から「高岳院」の院号を。またお氣に入りの松の大木が目立つていたことから「坂松山」の山号を賜り、以後「坂松山高岳院一心寺」の名称に改定されました。

また、寺宝となつてゐる「一行一筆心經阿弥陀經」（＊3）、ご真筆「坂松山」の山号額などを賜つた他、境内に植えるべしと宇治茶の苗、梅檀の苗など



幸村の顔

高橋俊太郎

■三光神社 真田幸村像

お顔を拝見して「えつ、ほんまかいな」と思わず

口を突いて出た。真田山三光神社の「真田幸村像」である。もう二十年以上前のことだが、天王寺区内の図書館に赴任して、区内の名所・旧跡を巡っていた時のこと。まだ大坂城天守閣にある「黒田屏風」に真田幸村が描き込まれていることも知らなかつたし、大坂の陣での幸村の奮戦譚から考えて、若武者のイメージを持ち続けていた。

私たちの世代にとつての真田幸村は、すなわち「真田十勇士」の幸村であり、猿飛佐助が仕える殿様だつた。小学校に入るか入らないかくらいで大映映画「忍びの者」や「霧隠才蔵」に夢中になり、雑誌「少年」の白戸三平「サスケ」の影響をまとめて食らい、黒っぽい風呂敷で覆面し、手作りの手裏剣で毎日戦つていた。だから、自己を投影していたのは猿飛佐助や霧隠才蔵であつて、真田幸村は主筋にあたる遠い存在で、凜々しく颯爽としたイメージが固まつていた。

長らく自分の頭の中に出来上がつた幸村像があつたから、近所のいかついオツさんにそつくりなお顔

を頂いたとあります。

慶長十九年と二十年（元和元年）の「大坂の陣」では、茶臼山一帯は冬の陣の「家康本陣」、夏の陣の「天王寺口合戦」等まさしく中心地として巻き込まれ、存牟上人は宝額、寺宝等を持つて高野山へ避難されるにあたり、坂の松に一首を詠んで掛け置かれました。

かえりきてまたもや見なん坂の松

すみあらずなよもとの庵を

そして乱後に帰寺。ただちに数千に及ぶ戦死者の遺骸を荼毘に付して供養。その跡に焼失した御影堂を再興し不斷念仏を修せられたと伝えられています。前記肖像画に添えられた解説によれば元和五年の秋、かねてより往生（死）の期を悟られたものか、絹地に自画像をととのえ、自ら銘文「彼佛心光常照是人」——彼の無碍光佛は是の人を常に照らし給う——と記し、続けて「元和七年十一月十一日」と三年後の年月日を先立つて記入。この遷化予定の月日？に違わず寂然として十念往生されたのですが、この事はまさに権化の証に違ひなく、「平素から道心堅固にして智慧深遠なりしかば自行もつて仏陀となられ

たりと人々は感涙を流した：」とあります。享年六十七歳であります。

このように見てきますと文治元年四天王寺の外郭をかりて芽生えた「法然上人ゆかりの寺」一心寺は、大坂の陣の時期に存牟上人によつて「家康公ゆかりの寺」として生まれ変わり、さらに幕末天保年間に真阿上人によつて、「宗派を問わない納骨の寺」へと変貌を続けてきた事になりますが、就中、「大坂の陣」時代に家康公との浅からぬ因縁を背景にして別格的存在感の一心寺を実現せられた存牟上人の行跡には何かしら秘められた事情を感じられてなりません。

*1 中興本誓存牟上人寿像

*2 中興本誓存牟上人行状—三九世高誓敬記

*3 文治五年に沙門陽豪によつて作られた諸宗碩德寄合書き「結縁經」の般若心經・阿弥陀經。行毎に異なる人物一三六名によつて写經・署名されたもので法然（源空）はじめ慈円、重源、明遍、明惠など当時の多彩な顔触れが網羅されている。

一心寺長老 たかぐち きょうぎょう

には、驚きとイメージが碎け散る無念さを痛感してしまった。

つまり真田信繁を知らなかつたのである。実在の日本一の兵が四十七歳であることも知らなかつたのである。しかし、ここにこそ「信繁」から「幸村」に転じてヒーローになつていつた真田幸村伝説の本質も含まれる。

真田山の三光神社境内に建立された幸村像は、昭和六十二年（一九八七）に大阪真田山ライオンズクラブの創立十五周年の記念に建立された。成瀬國晴画伯が「黒田屏風（大坂夏の陣図）」を参考に描いて、それをもとに銅像が造られた。したがつて、銘こそ「幸村」になつているが、屏風の真田信繁に比定されている黒鹿角の兜を被つた姿を比較的忠実に写して、巷間伝わつて来た錦絵や立川文庫の団絵とは異なつた、リアルな表現になつている。成瀬画伯の絵を見ると、像より細めで、陣中指揮を執る切迫感ある険しい表情に見える。近頃に改めてお顔を拝見すると、引き結んだ唇に豊かなコールマン髭で、視線の方向は東向きなので、ここが従来言われてきたように真田丸の跡地だとすると陣中から敵軍を見

やる姿ということになる。

その台座は真田家の菩提寺である信州上田市の長谷寺から取り出した石（名付けて真田石）を運んできて組まれた。銅像の横にあるのが「真田の抜け穴」で、大坂城まで一・六キロもの地下トンネルがあると伝えられてきた。



■黒田屏風（大坂夏の陣図）

六曲一双の屏風絵には、大坂城本丸の北方天満川に逃げ惑う女たちから、城前の豊臣七手組、四天王

寺、茶臼山、岡山の激戦、天王寺口の家康本陣まで、夏の陣の全面が描かれている。

筑前福岡藩黒田家伝来で、福岡藩の故実によれば、合戦に参加した黒田長政が戦いを記録するために、筆頭家老の黒田一成、または家臣の竹森貞幸に命じて作成したものとされ、長政が陣の八年後に亡くなっていることを考えると、陣後五年くらいの制作時期ではないかと推測される。現在は大阪城天守閣の所蔵で、国の重要文化財である。

生々しく描写され、真田信繁軍と徳川先鋒の本多忠朝軍がちょうど中心部分になる。ここでの真田信繁は騎馬して今にも軍の先頭に立たんとする勢いで、ふつくらした顔だちの上、髭も黒く描かれている。

真田信繁は九度山蟄居中の手紙に「髭黒きところは既になく、歯も抜けた」と自分で哀れに書いているが、この屏風絵からは中年の脂の乗り切つたような顔に見える。黒田長政にとつては敵将でしかも討死した信繁だが、その武勇を伝えてリスクトさえ感じられる描かれ方ではないか。両軍に誉れ高き真田信繁は、やはり当時から「日本一の兵」と讃えられていたことが感じられる。

■上田駅前 真田幸村騎馬像



真田の本拠地信州上田ではどうだろうか。上田駅前の水車前広場にある「真田幸村騎馬像」は昭和五八年（一九八三）上田城築四〇〇周年記念として建立された。三光神社より四年早く建てられていく。制作者は彫刻家の田村興造氏で、真

田幸村が上田城にいたのは青年期であつたところから、若武者の姿である。こちらのお顔は私がイメージしてきたものに近い。こちらも口髭をたくわえているが、元服してから髭を生やしたものなのか、一体いつからなのか、興味深々である。戦国時代のことで、上杉へ豊臣へと人質に出された信繁は、豊臣では馬周りの役について禄をもらつたとも伝えられるところから、おそらくこの頃からではないかと



新潮文庫

司馬遼太郎『城塞』

—「大坂の陣」の舞台 天王寺界隈を訪ねて

吉原みどり

書斎の旅

上田には、大坂の陣で信繁が騎乗した馬のものと伝わる墓があり、「真田栗毛埋所」とだけ書かれている。黒田屏風でも「栗毛の馬」に騎乗している。

さて、慶長二十年（一六一五）五月七日、夏の陣において徳川家康をあと一步のところまで脅かした真田信繁だつたが、敵に阻まれ手負いとなつて疲労困憊し、現在の安居神社の境内に残る一本松の下で休息しているところを、松平忠直隊の鉄砲頭西尾仁左衛門に発見された。信繁は自ら手柄にされよと首を差し出したとも伝わつてゐる。

従前から境内には大ぶりの石碑「真田幸村戦死跡之碑」が建てられていたが、平成二十一年（二〇〇九）十二月十七日に「真田幸村公之像」が建てられた。これは彫刻家・播間公次氏の制作により、一本



■安居神社 真田幸村公の像

想像してしまふ。

上田には、大坂の陣で信繁が騎乗した馬のものと伝わる墓があり、「真田栗毛埋所」とだけ書かれている。黒田屏風でも「栗毛の馬」に騎乗している。

松の下で休息している姿である。したがつて、兜を脱いでいるため、髪をほどいて後ろで括つた戦支度の頭で、武将の銅像としては珍しい姿ではある。すくと背を伸ばし、遠くを見やるお顔は、来し方を振り返る凜々しい表情で、家康を討ち損じた悔しさを超えたものと見受けられる。勇ましさよりも、静寂が支配する武将の銅像もいいものだと思う。立膝に置かれた手甲に、六文銭が金色に輝いてゐる。

現在、上田市立博物館が所蔵する「真田幸村画像」があり、作者や描かれた年代などが不明だが、晩年の信繁の姿を描いたものとされている。ここではこの画像の紹介はあえてしない。なぜかしら、私のイメージする幸村像からは最も遠いように思われるからである。

真田信繁が「幸村」と呼ばれるようになつたのは、陣後五十年を経て刊行された『難波戦記』からと言われば、上田、松代に伝わる文書でも「幸村」が使われてゐる。史実としての「信繁」、伝説としての「幸村」、いずれにも通じるのは「日本一の兵」としての顔ではないだろうか。

昨年、正確には二〇一四年から二〇一五年に「大坂の陣」四百年を迎えた大阪の町。豊臣から徳川に時代を画したこの戦いには、どんなドラマが息づいているのだろう。

日本史上（国内戦）最大といわれる東西軍の大激突は、東の徳川家康が全国のほとんどの大名を動員して西の豊臣一家を殲滅したという異色の構図を持つ。家康の巧緻な戦略に対し、大坂城は豊臣家最後の権威の象徴として、あえなくもしかし全力を抗して滅んでいく。司馬遼太郎『城塞』は、時の実権と幻の権力の対比を鮮やかに描き出している。

大坂城があつた上町台地の一画は、南を除く三方の防衛力が高く、自然の要塞地に適していたという。南方に位置する天王寺区界隈は、まさに冬の陣（慶長十九年十一～十二月）・夏の陣（慶長二十年四、五月）において攻防の舞台となつた。玉造・上本町・谷町・茶臼山・一心寺などはすべて、世紀の決戦となつた大坂の陣のステージだ。激戦地となつた上町台地の南半分を中心に、今に残る大坂の陣の足跡を訪ねてみよう。あたたかい日差しのにおいと木漏れ日の眩しさに身を浸しながら、血潮に染まつたこの

地の昔をおもう。

まず冬の陣において、西軍は現在のJR玉造駅から生國魂神社まで、およそ二キロにわたつてびっしりと一丈の長壁を築いていたという。その前方に真田幸村の要塞・真田丸が築かれていた。幸村の戦法で東軍が撃退された城南の戦いの舞台が、JR玉造駅から南東にある真田山公園だ。西軍の城兵は三ノ丸の最南限である現在の清水谷高校前の東西道路まで布陣し、対する東軍は真田丸の正面に東西二キロ、縱一キロにわたり、最左翼の伊達政宗軍は松屋町筋にいたという。布陣図を徒步で辿ると、軍勢の重厚さが推し量られ、空恐ろしい気分になる。この戦いでは、真田丸前方にあつたという篠山を囮にして幸村の銃卒隊が東軍の前田利常を挑発し撃滅したという。近年の研究では大阪明星学園の辺りに真田丸が築かれたとされているが、天王寺区は四百年を記念して、二〇一四年に「六文銭ファンド」という基金を立ち上げ、真田丸をジオラマで再現した。また、二〇一六年二月一日には大阪明星学園のテニスコート脇に「真田丸顕彰碑」を建てている。

慶長二十年（一六一五）四月より開戦された夏の

陣は、全国の大名を動員した東軍三十万に対し、西軍は五万の兵力で、最後の砦である大坂城は内部の謀反により燃え落ちてしまう。敗北を知りながら最後を飾る西軍の武将たちの覚悟が、いつそう決戦に汗と血を散らす。野戦における大決戦のひとつである天王寺口の戦線は冬の陣よりも南下し、西軍は四天王寺の南門一帯、更にその西南、茶臼山に真田軍の赤い鎧がしきつめられ、東軍は茶臼山の南方（天王寺口にかけて布陣した。家康の「寄せよ」の一言で五月六日の正午に開戦。勢いに勢いで応じる猛烈な射撃戦が始まり、西軍の真田幸村、毛利勝永らに對し東軍の本多忠朝と松平忠直が激突、西軍は巧妙な陣形とタイミングで東軍を押すが、東軍の圧倒的な人数の前に城へ撤退を始める。攻める東軍と退行する西軍の殺気に満ちた人の波が、玉造辺りから松屋町筋までを埋め尽くし、怒濤のように大坂城へと北上していくのだ。

『城塞』で一際切れのいい戦法を見せる真田幸村は、現在でも大人気の武将だ。二〇一六年の大河ドラマ「真田丸」も好評スタート。天王寺区が昨年開いた「真田幸村博」も大盛況だったとか。

彼は圧倒的に不利な西軍の側に立ちながら、戦局の多くを西軍の優勢に導いた。最後まで勝負を捨ててす、「今だ！」という瞬間を逃さない鋭さと勢いに惚れてしまう。西軍の勝機は家康の首を取ることのみと信じ、家康の本陣に「疾風のように」馬で乗り入れる大胆さと鮮やかさが印象的だ。また四天王寺西門付近に自身で開発した地雷を埋め東軍を壊乱した。

司馬遼太郎は彼が地雷の爆発音を聞いたとき、「この戦いにおける自分のすべきことがすべて了つたとおもつたにちがいな（い）」と書いている。燃え尽きた彼が立ち寄り、敵方に討たれた地が安居神社だ。天神坂から神社への石段を登ると、木々の呼吸が聞こえそうな清らかな境内が現れる。本殿の右手には「真田幸村戦死跡之碑」があり、膝を立てて座つてゐる鷹揚な幸村の銅像がある。

彼が大坂城への秘密の連絡通路として掘つたといわれる抜け穴は、『城塞』では家康が西軍に対する威嚇のために掘らせたものとして描かれているが、當時掘られたとされる穴が真田山公園北東に位置する三光神社にある。穴の中は人一人が腰をかがめて

やつと通ることのできる広さ。その右横に、今にも出陣しそうな勇ましい幸村の銅像が立つてゐる。

東軍の総帥家康についても、少し触れておこう。彼が冬の陣で本陣をおいた一心寺は、安居神社と逢坂を挟んで正面にあり、茶臼山の脇に立つ法然上人ゆかりの古寺だ。「家康が起居していた」と書かれるこの寺院は、冬の陣のあと和議が交わされた場所でもある。一心寺は家康との関わりが深く、家康の第八子仙千代の墓があり、彼の葬儀の際に家康が馬をつないだとされる「駒つなぎの松」もある。家康はこの松に因んで、一心寺の山号を「坂松山」（ばんしょうざん）としたともいう。また夏の陣において戦死した本多忠朝の墓が、酒封じの御利益があるとして人気だ。

四百年前、生きた人間の首を掻き切つて勝利を争つた生々しい時代の絵を想像することは難しい。けれどもそれは確かにあつたのだと、不思議な懐かしさがどこかからこみあげてくる。

（よしはら みどり）

文学碑の今 ① 織田作之助

口縄坂「木の都文学碑」と生国魂神社「織田作之助銅像」

矢田草之助

法善寺横丁正弁丹亭前句碑

大阪市が文学碑を建て始めたのは昭和五十五年（一九八〇）からのことで、天王寺七坂の一つ、口縄坂の上り詰めに建つ「織田作之助木の都文学碑」が第一号である。

その後順調に建碑が進められたが、十五基目の「薄田泣董金剛山の歌文学碑」が上本町西の東平北公園内に平成元年（一九八九）に建てられてから既に二十七年が経った。その東平北公園に面する東平小学校跡地には「大阪市文学館」が構想されたが、実現には至らなかつた。街の姿は変貌する。だからこそ碑を据える意義があるのだが、第一号から三十六年を経た今の文学碑に取材し、その文学の今をも探りたいと思う。

もちろん、これらの大阪市が建碑したもの以外にも、文学碑、句碑、歌碑は多くある。それらも含めて取材したい。

* * *

織田作之助の短編小説『木の都』は昭和十九年（一九四四）三月の「新潮」に発表された。路地長屋の多い上町で育つた主人公は小説家となって、ある初春に口縄坂を上り懐かしい町に戻つて来ると、そこには「矢野名曲堂」というレコード屋が開店していた。その主人公やその娘、国民学校に通う息子と心を通わせるが、息子は中学を落第して名古屋で徴用工として働くことになる。年の暮れに訪れる、ついに家族上げて名古屋に

出てしまつていた。

口縄坂は寒々と木が枯れて、白い風が走つていた。私は石段を降りて行きながら、もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終り、新しい現実が私に向き直つて来たように思われた。風は木の梢にはげしく突つ掛つていた。

この最終段落が碑に刻まれている。かつての縄文海進期の海食崖にある口縄坂は、寺院に囲まれ緑が多い。

（一九九〇年二月）



○）には府民による投票で「大阪みどりの百選」に選ばれた。選定された市内十か所のうち、天王寺区では口縄坂だけである。この「木の都文学碑」が花を添えているからに違いない。平成十二年（二〇〇〇）には「大阪市マイルドH.O.P.Eゾーン」に指定され、沿道の堀・門などの修景や坂の整備が行われた。ますます近代的な情緒も溢れる名所になつた。

宇野浩一と洋画家鍋井克之が宗衛門町から法善寺を歩いた随筆『木のない都』は昭和十一年（一九三六）に上梓された。宇野から消えてゆく大阪を書くよう勧められて書いたのが『木の都』である。

大阪は木のない都だといわれているが、しかし私の幼時の記憶は不思議に木と結びついている。

それは生國魂神社の境内の、旦さんが棲んでいるといわれて怖くて近寄れないが、樟の老木であつたり、北向八幡の境内の蓮

池に落まつた時に濡れた着物を干した銀杏の木であつたり、中寺町のお寺の境内の蟬の色を隠した松の老木であつたり、源聖寺坂や口縄坂を緑の色で覆ついた木々であつたり——私はけつして木のない都で育つたわけではなかつた。大阪はすくなくとも私にとっては木のない都ではなかつたのである。

平成二十五年（二〇一三）は織田作之助先生誕一〇〇年に当たり、大阪歴史博物館での「織田作之助と大坂展」、NHK土曜ドラマ「夫婦善哉」、河出書房新社から『織田作之助—昭和を駆け抜けた伝説の文士』、平凡社コロナブックス『織田作之助の大坂』、短編集では岩波文庫『夫婦善哉完全版』、実業之日本社『夫婦善哉・怖るべき女』など出版、復



妻一枝は結婚生活も五年間だけで先に亡くなつてしまふ。その一枝との京都銀閣寺界隈を懐かしんで詠んだ俳句である。

木犀の雨を クンバルシタの 女行く
にちなんで、銅像の背後には金木

扉が植えられた。銅像の作之助の視

線は、同じ境内に建つ「井原西鶴

像」を見つめている。敬愛して止ま

なかつた西鶴に対するのであるから、

作之助の銅像は少し小さめに作られ

た。師に対するの、新戯作派として

の謙虚さである。口縄坂の文学碑

とこの銅像は『木の都』でつながつ
てている。

この上町から法善寺にかけてが

主な舞台である『夫婦善哉』は、

やはり近代大阪を代表する小説と

言えるだろう。その法善寺横丁の

「正弁丹吾亭」前に据えられた句

碑は、

行き暮れて ここが思案の 善哉かな

この句は、住吉区千躰町（現墨江）

の石濱純太郎邸に寓居していた藤

沢桓夫の離れ屋での句会で読まれ

たものである。昭和十六年（一九

四一）の秋の句会は、藤沢桓夫と

永尾宗斤が宗匠格で催されて、こ

の時の画帖「星欄干」に織田作之

助が書きつけたものである。

「行き暮れて…」に碑は、織田作

之助の十七回忌を記念して、藤澤

桓夫・長沖一・前田藤四郎らが発

起人になって、昭和三十九年（一



九六四）の命日に建立された。長身の織田作之助を彷彿とさせる細長い自然石に、碑文はこの画帖の字のまま写されている。

正弁丹吾亭の関東煮は「安うて

うまいもの」として『夫婦善哉』

に登場するが、川島雄三監督の織

田作之助原作映画「わが町」のロ

ケにも使われた。かつてはここの一

二階で織田作之助賞の運営委員会

をしていたこともある。この店先

には平田春一の歌碑、西田当百の

川柳碑もある。

その正弁丹吾亭の経営者が替わ

ると聞いて驚いたのは一昨年のこ

とだが、何んいちも碑も変わること

なく続いているので安心した。世

の中には変わらないでいて欲しい

ものがある。

（やだくさのすけ）

編集だより

「故きを温ねて新しきを知る」とはどんな分野でも言えることでしょう。世の中にポッと出現したように見えて、何かしらバックにあるもので、特に小説の世界ではそれが厚みとなって迫ってきます。ところが、織田作之助青春賞やU-18賞の作品を読むと、逆に「温新知故」とも言えるがごとくに、おのれの「故き」を知る機会を与えられる場合があります。それが若さにこそ潜む「可能性」というものでしょう。

U-18賞の全文掲載のために、これまで記念冊子を作りだし、いよいよ今回は雑誌形式での発刊となりました。青春賞は「三田文学」に掲載され、受賞後二作目、三作目を書き続ける若き小説家も生まれています。世の中は「文学ブーム」と呼ばれるような状況も散見されますが、「温故知新」を含めて、文学にかかわる情報発信が十分とは言えません。特に、大阪発となると非常に心もとないのが実情です。

「文學回廊」は今のところ年二回の発行を予定していますが、今後は大阪を中心とする関西の文学界の情報や、ここに住んで執筆する作家たちの情報を提供したいと目論んでいます。ささやかな雑誌にこそ「可能性」があると信じて、次号にご期待ください。（高橋俊太郎）

表紙のことば

織田作之助が再び東京に出たのは昭和21年11月、客死する2か月前のこと。銀座の佐々木旅館に宿泊して旺盛に執筆し、編集者と打合せ、太宰治や坂口安吾と会っていた。

その頃、近くの珈琲洋食キムラヤで執筆する姿が表紙の写真である。作之助の養女となった織田穎子さん方に、この手札大の写真が遺されている。左に署名しているところからも、お気に入りだったのだろう。織田作之助の写真と言えば、バー・ルパンで林忠彦が撮影したもの有名だが、そのカウンター上にもコーヒーカップが置かれている。下戸だった作之助にとって、コーヒーは執筆の友だった。